

コラム

先んずれば制す、中央～東アフリカの資源開発

国際動向・戦略分析グループ 久谷 一朗

中央～東アフリカの国々、具体的にはエチオピア、ケニア、タンザニア、ウガンダ、コンゴ、モザンビークといった国々であるが、皆さんは国名からどのようなものをイメージするだろうか。大平原と野生動物、まさに「ジャングル大帝レオ」の世界を想起する方が多いのではないだろうか。日本のことをよく知らない外国人が日本を評して富士山と芸者で代表させるような、極めてステレオタイプなイメージと同じ類のものであるが、サハラ砂漠以南のアフリカの国々といえ、このくらい私にとって馴染みの少ない地域である。

その中央～東アフリカの国々について、最近、石油や天然ガスの開発に係るニュースを良く目にする。いわく、イタリアの石油大手 Eni 社はコンゴで新鉱区の獲得に向けて交渉中である、いわく、イギリスの石油開発 Tullow 社はケニアとエチオピアで開発計画を進めている、などといったものである。日本企業の例では、今年 4 月に、三井物産がアメリカの Anadarko 社と共同で、モザンビーク沖合で大規模な天然ガスを発見したことが報じられている。

アフリカ大陸のなかでも、アルジェリアやリビア、エジプトといったサハラ砂漠より北側の国々や、ナイジェリア、赤道ギニアといった象牙海岸周辺諸国で石油ガスが多く産出することはよく知られている。一方の中央～東アフリカというと、BP が毎年発表する統計にも埋蔵量に関する情報がない、もしくは一括りに「その他」で分類されているような地域であり、石油やガスの存在が十分に確認されていない地域である。

鉱物資源の面では、南アフリカが幅広い鉱物資源を産出しその世界シェアも高いことで知られているが、コバルトの生産量でザンビアが世界第 3 位、タンタルの生産量でエチオピアが世界第 3 位、ベリリウム生産量でモザンビークが第 3 位など、中央～東アフリカの国々でも、少なくない資源を産出する。

日本は、エネルギー供給の自主権益比率向上を政策目標の一つとして掲げている。エネルギー供給の全てといってよい量を輸入に依存しているため、日本の企業が日本で利用するためのエネルギーを、自身が権利を持つ鉱井から輸入することで、より確実かつ安価にエネルギーを調達しようとするものである。では、日本企業はどここの資源を獲得すればよいのだろうか。地理的に近い東南アジア地域や大洋州をはじめ、ロシアや中東、北アフリカといった現在主流となっている石油ガス輸出国はもちろん、中央～東アフリカも有力な候補であろう。

「先んずれば制す」、もっと簡単に言うと「早い者勝ち」という言葉がある。石油ガス開発は、早い者勝ちの世界である。まだ海のものとも山のものとも分からない資源の開発権を安く獲得し、鉱脈を掘り当てる。中央～東アフリカは、大失敗に終わるリスクを抱えながらも、今まさに「早い者勝ち」の奪い合いが行なわれている、注目地域の一つかもしれない。

///

お問い合わせ : report@tky.ieej.or.jp